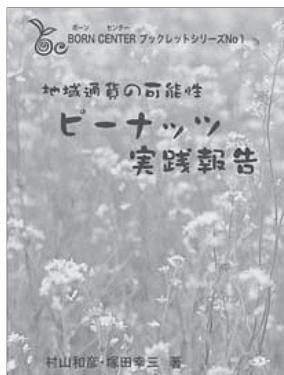


松波発、花と緑のまちづくりと地域通貨の可能性を探る

特定非営利活動法人千葉まちづくりサポートセンター
(千葉県千葉市)



事務所が入居している建物



同センター発行の地域通貨関連冊子

I. 団体の目的と経緯

時は1998年6月、千葉大学西千葉キャンパスの一角で、同大学工学部都市環境システム学科の延藤安弘教授（当時）を中心に、まちづくり・市民活動の実践者、指導者、研究者等が、それぞれの今後の活動に対する考え方などについて発表し、意見交換をする初めての場（学習交流会）がもたれていきました。そこでは、延藤教授の専門分野でもある“コープラティブ住宅”が主なテーマとなっていました。

この集まりは以後月1回開かれるようになり、回を重ねるにつれて次第に参加者も増えていきました。こうしたプロセスの中で、「これから市民は、自立的に公益活動を創造、また活動を継続し、組織を運営していく能力を市民団体が持つようになること」の重要性が確認されました。と同時に、「一般的の市民や市民団体がそのような能力をもつための社会基盤が、我が国では十分に整備されていない」という現状も指摘されました。

そこで、こうした社会基盤を千葉県内の市民自らが率先してつくり出せないものかと、参加者の有志が市民活動のサポート機能について検討するようになり、民間非営利のまちづくりサポートセンター設立の構想が大きくふくらんでいきました。そして1999年2月14日、「千葉まちづくりサポートセンター（通称：ボーンセンター）」は産声を上げたのです。

さて、我々の活動目的についてですが、相談対応等による「市民活動のサポート」から少し範囲を広げ、大きくは「ワークショップ等の参加のデザイン技術を駆使した、市民参加のまちづくり（市民・専門家・行政によるパートナーシップ型まちづくり）の支援・推進」と掲げています。と言っても、まちづくりの範疇は非常に幅広く、また時代とともに変遷しており、それに伴い支援の内容も多岐に渡っているのが現状です。ここでより詳しく説明することは紙面の都合上できませんが、まちづくりの主役はあくまでも地域住民であり、我々は専門的見地に立ってアドバイス等の支援はしますが、何かを押し付けるようなことはしない、というスタンスをとっていることが特徴です。

ところで、今回助成の対象に選定された活動には、「地域通貨」の活用が含まれますが、これを「まちづくり支援」と結びつけるのは難しいと感じる方もいるかもしれません。少し解説

をすれば、地域通貨はあくまでも一つのツール・システムであり、まちづくり（コミュニティ再生、地域活性化等）の様々なシーンで柔軟に活用されることを想定しています。つまり、無責任な言い方に聞こえるかもしれません、我々は一つのきっかけとして地域通貨を提案しているに過ぎないです。むしろ、住民の方から画期的な地域通貨の活用法を教えられることもあります。もちろん、今回の助成事業の応募主体となったことがそうであるように、ただきっかけを与え、口先のアドバイスをするだけでなく、地域に根ざした実践活動や裏方的な作業も支援の一環として行っています。

II. 活動の内容

今回の助成事業では、「商店街・地域通貨サミット」（以後、サミットと表記します）というシンポジウム的なイベントの実施を大きな活動項目としました。もちろん、ただサミットをやつて「盛り上がってよかったです」では何も生み出しませんので、いかにその成果を地域に還元し、活動につなげていくかもポイントでした。しかし、サミットの企画・運営が地域の活動の一つとなっていたということも実感としてあり、準備作業も含め、運営に関する一連の取り組みを通じて様々なことが起ったり、見えてきました。よってここでは、サミットの準備や運営の様子を中心に記述しようと思います。

まず、企画の概要（要点、特徴）を簡単に記します。

- 1) 参加者には地域の商店街（ゆりの木商店街）で地域通貨体験を行ってもらうなど、期間中の地域の生活・活動全体を参加・体験の対象とする。
- 2) 会場、宿泊場所は、出来るだけ対象地域の近隣で設定する。
- 3) 地域で手作りのイベントとして運営する。商店会、市民（大学生ら）、ボーンセンターが役割分担し、連携・協働のもとに実行する。

このように、文字どおり「地域密着のイベント」としたこととは、現実として対象地域では地域住民（商店街）が主役となつた地域活動が行われていることを実証することになりましたし、また「地域密着」としなければ、今回のイベントの成功はなかつたと思われます。以下、エピソードも含めてランダムに活動の様子を紹介します。

準備についてですが、予想以上に参加者が集まったこともあり、ボランティアスタッフの動員が欠かせない事態となりました。その確保の方法としては、ボーンセンターの理事はもちろん、「ピーナッツクラブ」の会員（地域通貨の利用メンバー）、そしてゆりの木商店会など地元の住民の方、さらには近隣の千葉大学などの学生諸君にも声をかけました。ちなみに、千葉大学の学生で一般参加の申し込みがあった人には、参加費との交換



「商店街・地域通貨サミット」の様子
1



「商店街・地域通貨サミット」の様子
2

を条件にスタッフとしての協力をお願いするなどもしました。また、当日スタッフとして、千葉市の職員研修所からNPO活動への体験実習という事で3名を受け入れるなどしました。最終的に、当日のみの協力者も含めると学生さんは約10名が集まり、非常に大きな戦力となりました。こうしたことを通じて、新たな人のつながりが生まれるなどの成果もありました。



「商店街・地域通貨サミット」の様子
3



「商店街・地域通貨サミット」の様子
4

具体的な作業については、大きく①サミット運営体制および会場設営準備と講師手配、②参加者募集中体制の確立および積極的PRの手配、③地元商店街の受け入れ態勢の準備、に分類して行いましたが、③については商店街の主体的な協力が欠かせませんでした。すなわち、後述しますが昼食や交流会は商店街を利用していただくことにしたのですが、ここで特定のお店に利用者が集中してしまうと、商店街の中に不協和音が生じないとも限りません。そこで、商店会長である海保眞氏に受け入れ店舗のとりまとめと、交流会については参加者のお店の割り振りを行ってもらいました。（なお、9店舗が交流会の会場として協力いただきました。）特に参加者の割り振りは、その数が確定しないとできないこともあり、また当日のキャンセルや追加申し込みで直前まで慌しかったにもかかわらず、海保氏の地元での長年にわたる実績を背景とした信用と、公平無私な行動力により、見事に調整役を果たしていただきました。

他の準備や運営に関するエピソードとしては、レンタルショップからパイプ椅子等の大きな備品を借りたためその運送の必要が生じたのですが、商店街の畳屋さん（榎本畳店）が運転手つきでトラックを提供していただきました。また、会場案内の看板は、商店街から立看フレームを借りて配置した他、交流会会場の案内ポスターはピーナッツクラブメンバーの手作りで、パウチ化はインテリアショップ「サロン・デ・イデ」にお願いし、またパソコンやプロジェクターは実行委員会のメンバーや学生から借用するなど、労働力のみならず資材も提供いただきました。まさに家族のような絆があつて開催にこぎつけたと言っても過言ではありません。他に当日その場で、車で駅まで人を送迎するというボランティアを買って出てくれた人がいたり、手薄な受付の様子を見て「何か手伝うことはありますか？」などと申し出てくれた人もいました。また最終日には、会場の机や椅子の撤収作業を、参加者の方にも何名かお手伝いいただきました。

会場についてですが、2～4日目は、地域内にある町会の公民館を主会場としました。恐らく町会の公民館で全国規模の催しごとが開かれるのは前代未聞の事だったでしょう。しかし、管理者の方も快く開催に協力していただきました。また、会場

となるホールは70m²ほどしかなくテーブルを入れれば50席も取れないこと、マイクはあるが映写設備などはないこと、駐車場がないことなど、会場設備の心配などがなかったと言えばうそになります。しかし、地域での開催という前提からあるがままの施設を利用することとしました。それでも地域での活動を体現できること、アットホームな雰囲気を演出できることなど、この試みは成功だったといえると思います。



「商店街・地域通貨サミット」
地域通貨利用体験 1



「商店街・地域通貨サミット」
地域通貨利用体験 2

また1日目については予想を上回る参加者が集まったため、急遽会場を変更しました。変更先は公立の高等学校の研修室のようなところだったのですが、商店会長の海保氏と校長先生が知り合いだった（地域活動を通じて）といったこともあり、快く会場を提供していただきました。

「地域の生活・活動全体を参加・体験の対象とする」という主旨から、当日は地元商店街を積極的に利用していただくこととしました。参加者全員が一箇所に集まれるような規模の飲食店はないのですが、昼食はもちろん、夜の交流会でも参加者の方には地域内の10箇所近い飲食店に分散して利用してもらいました。交流会では、講師や来賓の方も各お店に分散していただき、6、7人の参加者も含めてグループとなり、講師の身近で一体となって議論する事としました。これも結果的に成功だったようで、各お店で議論が沸騰しました。

以下、サミット以後の活動についても少し触れたいと思います。地域では、定期的に以下のイベント等を行いました。

アミーゴワークショップ

毎月第2水曜日の午後2時半から4時半頃。ゆりの木商店街の商店主を中心とした、松波地区周辺の「ピーナッツクラブメンバー」が集まり、地域をより魅力あるまちにしていくためのアイデアを持ち寄って実践したり、経営についてのざっくばらんな話し合いをしたりする場。学生や商売に携っていない人も参加して率直に意見を発しており、いつも新鮮でかつ楽しい話し合いが行われている。

第三土曜市

毎月第三土曜日（1、2月を除く）の午後12時半から3時頃。ゆりの木商店街で2000年の冬から続く、ピーナッツクラブメンバーの熱田氏による野菜や卵の直販を中心とした、手づくり感覚のイベント。回を重ねるごとに内容も変化、発展しており、フリーマーケットや各店舗のオリジナル商品の販売、福祉施設や個人の作るパンや草花等の販売など、月替わりの催しが行われている。

また、単発では、地域住民のみならず、サミットや第三土曜

市の参加者も交えて忘年会や交流会を開催しました。助成金を使ってお酒を飲んだというわけではもちろんありませんので、これらはここで報告すべきことではないかも知れませんが（どこまでが助成事業としての活動なのか、またその成果なのかの線引きは難しいですが）、サミットがきっかけになった一連の活動ということで簡単に報告します。

- ・地域通貨サミット・忘年会

平成15年11月21日（金）夜開催

- ・第1回ピーナッツクラブパーティー（交流会）

平成16年2月21日（土）午後開催



ゆりの木商店街・第三土曜市の様子

1



ゆりの木商店街・第三土曜市の様子

2

また、この項目の最後になりますが、事務的な活動・作業としては、イベントレポート（報告書）のとりまとめを行ったことを報告します。報告書は、サミットの事例報告の録音がうまくいかなかったことなどもあり、完成が予定よりも大幅に遅れる事態となってしまいました。そうこうしているうちに、社会的に地域通貨を取り巻く様々な動きも起これ、これらも参考資料として添付するなどし、単にイベントの報告書に少し付加価値を加えた内容に随時更新しました。

III. 活動の成果

IIの「活動の内容」と少し重複する部分もあるかと思いますが、成果をまとめます。

サミットについてのみを振り返ると、準備や当日の運営がまさに地域活動の一環となっており、地域住民や周辺の学生なども巻き込み、コミュニティを活性化させるきっかけになったと言えると思います。

サミットの内容に関しても、参加者から「ぜひ第2回を」という声が上がっているほか、忘年会に遠方から参加した人もおり、参加者にコミュニティづくりへの意欲を喚起させる効果はある程度はあったと言えるのではないでしょうか。

一方で、前述のように、どこまでを今回の助成事業の成果として評価してよいのか、なかなか難しいところがあると思います。また、サミットの参加者や関係者以外、すなわち周辺地域に活動を展開させるという点については、「第三土曜市」等のイベント以外はあまり具体的な活動ができなかつたため、このあたりの成果はまだ出ていないというのが実態です。

しかしながらこの1年間で、学生さんを中心に確実に地域活動に参加する人は増えています。地域通貨があくまでもコミュニティづくりの「きっかけ」であるように、今回の助成事業も大きなきっかけ、動機付けとなっていることは間違ひありませんので、来年度以降の活動につながる気持ちづくりができたことも成果の一つと言えるでしょう。

IV. 今後の取り組み

サミットのプログラムを振り返っての課題・反省は、この場限りのイベントとしないためにも、「サミット宣言」など次につなげる仕掛けが必要であったのではないかという点があげられます。これは地域というよりは、対外的な視野に立ったものです。

一方、対象地域に目を向けたとき、Ⅲでも述べたように周辺地域に活動を展開させるという点について、具体的な取り組みができなかつたことが反省としてあげられます。これまでも地域通貨の会員は600名前後と多くいたものの、それが分散していたこともあり、地域通貨をきっかけとして地域のコミュニティづくりに貢献する、すなわち不特定の公益に寄与するという点では、はつきりとした成果をあげられていなかつたことも事実です。

そこで、今後はさらに会員間の交流を深め、また地域内の会員を増やしていく取り組みも検討課題になってくると考えられます。

対象地域では、よい意味で肩肘張らず、地域活動が続いています。恒例の「第三土曜市」も自発的にリニューアルを繰り返し、チラシのポスティング、シンボルとなる立て看板の作成を実施しているほか、露天への出店者も新たに現れるなどしています。今後、大きな新しい取り組みをするというよりは、今までの流れを受けて、住民主体であまりお金をかけずにできる取り組みを続けていくという路線は基本的に継承していきます。

最後に、行政との協働も視野に入れた今後の取り組みということで、昨年度から今年度（予定）にかけた動きを整理します。

平成15年度に千葉県では、商店街振興のために、商店街と地域が連携して活性化を図るモデル事業を立ち上げる事とし、対象商店街の募集があり、「ゆりの木商店会」ではそれに応募をしました。結果から先に言うと採用には至りませんでしたが、企画のねらいの要点を簡単に記します。

- ①地域通貨ピーナッツを媒介としながら、活動地域を広げ、NPOとの連携に加え大学との連携を強めていく。
- ②地域通貨、NPO活動、大学、地元商店街との地域連携を踏る事により、地域再生を図る。

ここでいう「商店街」は、ゆりの木以外の特定の商店街も対象にしています。公募事業としては採用に至りませんでしたが、企画書に書いた計画は一部実行に移されており、地域、商店街と大学（学生NPO、研究室）の連携はかなり密になっています。この動きが今年度はより一層目に見える形になるでしょう。

また今年度は、千葉県では行政による地域通貨の普及に対する支援事業も始まる予定です。お金がつけば、地域内のみなら



ゆりの木商店街の緑化活動の様子

ず、対外的な喚起も含め、さらに活動を活性化させることができるべきでしょう。もっとも、お金だけを頼りにするのはよくありませんが、この流れに乗ってさらなるステップアップを図りたいところです。団体としては「第2回商店街・地域通貨サミット」の開催も視野に入れた取り組みを展開していこうと考えています。